

## 山下りん研究 (三)

### ペテルブルグのノヴォジエーヴィチ復活女子修道院と東京十字架聖堂

鐸 木 道 剛

#### (一) 『新朝野新聞』の記事より

昨一九八七年(昭和六十二年)の春から初夏にかけて、山下りん展が盛岡の橋本美術館をはじめ、山下りんの郷里の笠間にある日動美術館他で開催されたが、その折に、彼女についての新発見の文献資料が紹介された。

それは『新朝野新聞』に明治二十七年三月十七日から二十二日にかけて四回連載された記事「日本唯一聖堂畫師 山下女史立志譚」である。彼女のペテルブルグ留学は明治十四年春から十六年春までだから、既に帰国後十年を経た記事ではあるが、臨場感あふれる内容からみて、山下りん自身へのインタビューをもとに書かれたのに相違なく、彼女が滯露日記に記さなかつたことも伝えていて貴重である。

たとえば滯露日記によると、一八八一年(明治十四年)一月二十六日、ロシアへむかうエーゲ海から黒海への途上の船で「一面二雪」のコンスタンチノーブルに立寄った彼女は、「トルコノ聖堂元ソビヤの聖堂」を見物し、夜は船に戻つて一泊、翌二十七日は雨で、昼過ぎ雨があがったあと、「午後四時出舟ス」なのであるが、『新朝野新聞』によると、その時彼女は、ボスボラス海峡沿岸の「風光餘りに面白く旅の愁きを忘れて心すがく」とつい眺め入りつ、あはれ畫の材料にもせまほしとして佇んでいるうちに、

ペテルブルグのノヴォジエーヴィチ復活(露本)

船におくれ、あやうく置いてけぼりを食うところだったらしい。既に港をはなれてしまつていた船が「向ふの岸の邊に一人の黒影」を認め、船長の采配でしばらく留まり、本船から短艇が出て、彼女はそれに乗つてやっと追いついたという。そして「一同が吾れに懇ろなる心の程のうれしくて思はず一筆を溢した」のであつた。

また留学帰途のバリ滯在についても、彼女の日記にはみえなかつた一面があらわれている。日記ではバリ滯在の一八八三年(明治十六年)三月十一日から十五日までの間、彼女は十三日に「近所ヲ少シク見物」し、最終日にナポレオンの墓所を訪ねている他は、ロシアからバリ在住のロシア人へのことづけなど雑用にあけくれているようにうかがえるが、『新朝野新聞』によると、修道女のいでたちの彼女は、バリの人々の「目引き袖引き笑ひの聲々」にもかまわず、ひとりで凱戦門見物にかけ、あげくには迷児になり、手真似で道をきくと、支那公使館にたどりついてしまったといひ、二年間の留学生活の疲れを感じさせないくらい活発にバリの街を歩きまわっていたようなのである。

## (二) ペテルブルグのノヴォジェーヴィチ復活女子修道院

ほかに、この『新朝野新聞』の記事には、山下りんが日記には記さなかったことが含まれている。彼女がペテルブルグで九二年すごした修道院についても、全体の様子についての記述がある。短いのでその部分の全文を引用しよう。

女史が入門せる修道院といふは舊教徒の寺院にして内には尼三百人を養ひ外に貧民の子弟七八十名、諸工女若干名合せて五百名の婦女ありて何れも祈禱の餘暇をもて縫箔<sup>ぬいばく</sup>、聖堂講など一切の美術品その他麵包<sup>ぱん</sup>などを製造し汎く賤路を求めて寺院維持の資に給するものにて此に入るものは上帝に事<sup>つか</sup>へ兼ねて修業をもなし自給の道をも求むるの組織なりとぞ。

ここに記された修道院がノヴォジェーヴィチ復活女子修道院であることは、川又一英、中村健之介両氏によって確認されている。この修道院については同名のモスクワにある修道院ほど古くもなく、修道院としては現在もはや存在していないため、手軽に参照できる資料もあまりないのであるが、一八九二年のブロックハウス・エフロン刊のロシアの『百科事典』を見ると、創立は一八四五年、はじめはネヴァ川北岸のワシリエフスキー島にあったが、一八五四年にモスクワ関の近郊に移った。一八九二年現在、旧所在地のワシリエフスキー島にはブラゴヴェスチエニエ(受胎告知)教会が残っている。修道院には教会教員女学校、初等学校、絵画と金刺繍の工房が付属しており、墓地には詩人ネクラソフが眠っていると記されている。<sup>(註三)</sup>『新朝野新聞』が「聖堂講」に加えて「縫箔」の仕事を挙げている

現在、修道院の建物は発電機製作研究所として使われており、番地はモスコフスキー大通り一〇〇番<sup>(註四)</sup>。南南東方向にモスクワに通ずる街道すじにそって建っており、その先には、一八三四年から三八年にかけて建造された露土戦争勝利を記念するモスクワ凱戦門がみえる。修道院内の教会堂は今倉庫に利用されている。広大な墓地にはネクラソフの他数多くの著名人が眠っている。なかでも世紀末ロシアの象徴派を代表する画家ミハイル・ヴルーベリ(Mikhail Aleksandrovich Vrubel, 1856-1910)の墓もあることは、山下りんの同時代人としてのヴルーベリを考えている筆者にとつては感慨深い。このことについては別の機会に論じたい。

当時のノヴォジェーヴィチ復活女子修道院についてのもうひとつの資料は、一九〇八年ペテルブルグ刊の『聖なるルーシの大修道院、修道院、教会、ペテルブルグ管区』<sup>(註五)</sup>で、管区内の修道院と教会の歴史と現状についての五百ページを越える大冊である。この書物は一九七九年に川又一英、中村健之介両氏が、山下の滞在していた修道院を特定するきっかけとなったもので、それは、ノヴォジェーヴィチ復活女子修道院の個所に、山下の旅券願に身元引受人として記されている修道院長エフストリヤの肖像と、山下の滞居日記に度々登場する画教師ヨルダンの名が見付かったからであった。<sup>(註六)</sup>

この修道院についての章は十五ページにわたるもので、一九〇八年刊だから、山下滞在時から二十年以上を経てはいるけれども、彼女の居た当時の環境を思いえがくよすがとなる細部の記述を含んでいる。以下それに従って修道院のようすを述べてゆこう。

市街部とはオブヴォドヌイ水路でへだてられており、全面積は五十三デシャーチナ千四百一平方サージェンつまり換算すると約五十八ヘクタール。ザバルカンスキー大通り<sup>イリメズク</sup>つまり現在のモスコフスキー大通りに面して、中央門から八サージェン（十七メートル）のところに大聖堂がそびえ、左右それぞれの建物の真中には、五つのクーポールをもつ、てっぺんの十字架まで十六・五サージェン（三十五メートル）の教会堂がある。

問題のイコンの工房は、むかつて右の建物の二階にあった。二階には他に、素描の学校、金めつき、刻印、金刺繍などの仕事場があり、カンバスや板にパテを塗って下地をつくるのは、同じ建物の地階で行なわれていた。一階には修道院長室をはじめ、図書館、宝物室、客間などがあつた。

その二階の絵画工房の様子と、イコンを制作する際の手本、そして絵画工房の修道女たちのグループ写真が掲載されている(図2・3・4)。工房では明るい窓にそつてイーゼルが並べられ、右奥には、横写されている手本のひとつが見える。グループ写真の修道女たちは、山下りんの後輩にあたることになる。その背景には、彼女たちが描いていたイコンがある。

修道院は一七四八年にエリザヴェータ女帝の創建になるものが前身で、それが十九世紀はじめには廃れ、ニコライ一世が一八四五年に再建した。

しかし実際に再建を熱心に主導したのはニコライ一世の娘で、後にヴェルテンベルグ王妃となるオリガ・ニコラエヴナ(Ольга Николаевна 1822-1892)であつた。修道院にイコン工房を付属させたことは、オリガ・ニコラエヴナが慈善事業に熱心で、貧しい人々のための裁縫や絹物に加えてイコン制作もおこなっていたこと、また再建された修道院の初代の院長に任命されたベロゼルスキー地区グリツキー修道院出身のフェオファニヤ・ゴトフツェヴァ(Феофания Горюпова 旧姓 Шегалишкова 山下の日記に頼出す

るフェオファニヤとは別人)もイコン画家であつたことと関係づけられて

いる。  
イコン工房の最初の指導者は、一八四五年に院長フェオファニヤと同じくグリツキー修道院から移ってきた修道女アルテミヤ(Артемиа)とリディヤ(Лидия)で、彼女たちはイコンを制作し、新参の修道女たちの画教師となつた。一方色で絵を描くことを教えたのは、美術アカデミー会員の画家

ヤコヴレフ(Я.И.Ковалев 生歿年不詳)で、一八四九年から六二年まで務め、その後ネフゾーロフ(П.И.Несонов 生歿年不詳)が六二年から六九年まで、コルチン(А.А.Кортин 生歿年不詳)が七一年から七四年まで、ティホブラゾフ(Н.И. Тихобразов 1818-74)が七四年七月から十二月

まで、と続き、六年間の空白のち一八八〇年より美術アカデミーの校長ヨルダーン(Ф.И.Иордан 1800-83)が、一八八三年十一月十九日に歿するまで務めた。山下りんが学んでいたのはこの時期である。その後ヴァフテル(E.A.Вахтер 1860-?)<sup>(補注)</sup>そしてチスチャコーフ(П.П.Чуриков 1832-1919)<sup>(註九)</sup>、ポトキン(М.П.Поткин 1839-1914)<sup>(註七)</sup>と画教師が変わり、そして

一九〇八年現在では、修道女アングニヤ(Ангния)が指導にあつている。また山下りんが滞在していた時の修道院長で、彼女の身元引受人であり、帰国後山下がロシアへ出した手紙にも名のみえるエフストリヤ(Евстрия)については、その肖像(図5)そして、その墓が先代の修道院長フェオファニヤの墓と並んでいる写真(図6)が掲載されている。

ここにはそのほか、日本の正教会に関係のありそうな事実がふたつ見い出される。ともにお茶の水のニコライ堂に関わりがある。

ひとつはイコン工房が一八四五年に活動をはじめた当初、修道女たちはイコンの地に金をのせることはできたが、地に打出し文様をつける技術は

なく、それについては、当時有名だったイコン画家ペシエホーノフのところに送って、仕上げられたというくだりである。<sup>(註十二)</sup>ペテルブルグのペシエホーノフとは、我々にはすぎさま、ニコライ堂のために数多くのイコンを制作したヴァシリイ・マカロヴィチ・ペシエホーノフのことを思い起こさせるが、ニコライ堂のためのイコンは一八八〇年の制作であり、このペシエホーノフは、その父で、一八四八年から五十年にかけてキエフの聖ソフィア教会のフレスコ画を修復したマカール・サムソノヴィチ・ペシエホーノフのことであろう。<sup>(註十二)</sup>つまりノヴォジョエーヴィチ復活女子修道院は、ペシエホーノフのイコン工房と、マカールの時代に速からぬ結びつきがあった。しかし次代のヴァシリイ・ペシエホーノフのイコンがニコライ堂にもたらされたのは、一八七九年から八〇年にかけてロシアに一時帰国していたニコライが、ペテルブルグの府王教イシドール(Исидор 俗名 Маров Сергеевич Никольский 1799-1892)に依頼した結果であり、<sup>(註十三)</sup>ノヴォジョエーヴィチ復活女子修道院が直接関与したと考える余地は—残念ながら—ない。

もうひとつは、既に(図3)として出したイコンの手本を示す写真のなかに、一九〇二年(明治三十五年)にニコライ堂に掲げられたロシア・イコン(図7)がみえることである。関東大震災で焼失してしまったニコライ堂のイコンについての資料のひとつである『東京ハリストス復活本聖堂小誌』は、このイコンの作者を「有名なるプロフェッショナル・ネフ氏」と伝えているが、<sup>(註十五)</sup>このネフとは、ペテルブルグの美術アカデミーの教授で、イサク大聖堂のイコンスタスを描いたティモレオン・カルル・フォン・ネフ(Timoleon Karl von Nef ロシア名 Тимофей Андреевич Нефф 1805-76)に他ならない。<sup>(註十五)</sup>香炉をもつ天使を描くネフ作のこのイコンは、当時盛んに

コピーされたようである。<sup>(註十七)</sup>あとで記すように特定のイコン工房が特定の図柄を独占するというようなことはなかったはずだが、ニコライ堂にロシアから送られてきたのが一九〇二年のすこし前であろうし、それはこの『聖なるルーシの大修道院、修道院、教会』の刊行年の一九〇八年に近く、このイコンが山下の滞在していた修道院で模写されて、日本に送られてきたということとは、考えられないことはない。

実際山下のペテルブルグ滞在時の一八八一年八月にも、イコンがひとつその修道院から日本に送られていることが、彼女の日記からわかるのである。しかし何よりも、東京での正教会の最初の礼拝堂である明治八年落成の十字架聖堂には、山下のペテルブルグ到着以前に、そのノヴォジョエーヴィチ復活女子修道院より大量のイコンが送られてきているのであった。それも画家は、山下の修道院での師フェオファニアだというのであり、次にその東京十字架聖堂について記そう。

### (三) 東京十字架聖堂

お茶の水のニコライ堂の敷地内に、ニコライ堂に向かいあつて洋館がある。<sup>(註十九)</sup>現在は改築を経て事務所として使われているが、かつてはその二階に十字架聖堂と呼ばれる主教ニコライの私的な礼拝堂があった。この礼拝堂については、明治三十八年刊の『東京ハリストス降誕十字架聖堂記念畫帖』がある。以下引用する。

我らの尊榮なる大父(ニコライのこと)引用者註が、光榮なるハリストスの正教を弘布の爲に、函館から初めて東京にお出でになつたのは、

明治五年の頃で、——中略——其後漸く斯の駿河台に居を托するを得て、翌六年茲に傳道館と家裡聖堂（十字架聖堂のこと——引用者註）の建築を起し、漸く此館の大部分が成るに及んで、初めて館内に祈禱が行はれたのは明治七年の末で、八年の初めには、聖堂も大體が落成しましたから、成聖の略式も行はれ、引續き、主日祭日等の公祈禱も行はる、ことになりました。併し當時はまだイコノスタスは出来ませんでした。——中略——今の様な美妙的イコノスタスが全く出来上つたのは明治十四年でした。（註十一）

このイコノスタスが、ペテルブルグ・ノヴォジェーヴィチ復活女子修道院の修道女フェオフィアニヤの制作になるというのである。イコノスタスに關する個所を再び引用する。

初め（千八百七十九年明治十二年の頃）斯聖堂にイコノスタスを設立するに付て、我が大父は、當時モスクワのミトロポリトなるインノケンティイイ尊師に書して、聖像等のことを御頼みになりました。すると尊師は之をモスクワ（ペテルブルグの誤記——引用者註）の女修道院に在るフェオフィアニヤという畫師に紹介して彼処に必要な一切を揃へることを托したのです。同畫師は敬虔と技術共に備はれる修道女で、多くの門弟子を持てをりました。（イリナ山下女史も往年彼の許に往て御研精になつたのです。）尋で大父は聖務の必要に因て御帰國になりました（ペテルブルグで主教に叙聖された一八七九年から八〇年にかけてのロシアへの一時帰國をさす——引用者註）から、彼女に面して親り其勞と技術を御覧になりました。斯の聖堂の聖像は大小総て卅一面ですが、悉く銅の板に背景を厚く純良の鍍金した物で、其物料ばかりでも大約四五百圓

ペテルブルグのノヴォジェーヴィチ復活（譯木）

を要したのですが、フェオフィアニヤ女史は自ら其地の敬虔家を遊説して日本教会の為に此聖物の費用を獻せしめ、其から大に丹精を奮ひ斯の美妙崇高、驚くべきの技術を以て、此だけの聖像を揃へて斯の聖堂に獻じたのです。女子の姉にアポロニヤといふ人が有まして、女修道院の副長でした、亦我が日本教會の為に厚意を表して白き祭服を製つて獻じました。我らは須らく我女（カノヤ）らの厚意を感謝して其救ひを祈るべきです。（註十二）

ここに登場するフェオフィアニヤとアポロニヤは、山下りんの滯露日記に頻出し、彼女の遺品のなかにも並んでの肖像写真（図8）が含まれているふたりの修道女に他ならない。明治十年代はじめのことを明治三十八年になつて記録したものであるので、史料としての扱いには多少とも慎重にならねばならない。しかし修道院長エフストリヤの名は、山下の旅券願に既に身元引受人として記されており、山下出立を伝える明治十三年十二月十五日付の『正教新報』の記事にも、「山下イリナ氏は——中略——過る十二日横浜を出帆して露西亞國に航行せられたり彼の地へ到着の上は聖彼得堡なる女修道院長エウストリヤ氏の管下にある女教師フェオフィアニヤ氏に隨從して學ばるる由」とエフストリヤとフェオフィアニヤの名が挙がっているであり、山下のペテルブルグ到着以前から、このノヴォジェーヴィチ復活女子修道院は、フェオフィアニヤ制作のイコンによって日本の正教会と深い關係を既にもちはじめていた。

つまり状況を整理すると、掌院ニコライは東京十字架聖堂のイコンの件で、正教伝道協會の会長であるモスクワの府主教インノケンティイ（Иннокентий 俗名 Иван Евсеевич Виланкин 1797-1879）を通じて、（註十三）ペテルブルグのノヴォジェーヴィチ復活女子修道院の画家である修道女フェオフィアニヤのこ

とを知り、イコンの制作を依頼した。そして一八七九年から八〇年にかけてロシアに帰った際には、依頼していたイコンの出来ばえをみるためにフェオファニヤに直接会っている。<sup>(註二十三)</sup>そして山下りんは「ニコライ氏の紹介を以て」(前出『新朝野新聞』の記事より)ノヴォジェーヴィチ復活女子修道院のフェオファニヤの許におもむくことになったのである。ニコライの帰国は一八八〇年(明治十三年)十月十七日、<sup>(註二十四)</sup>それから彼は山下に留学の話を持ちこみ、山下の旅券願は十二月三日付で、横浜出立は日記から十二月十二日であることがわかるから、山下にとつては二ヶ月足らずの間の急な身辺の変化であった。その間ニコライの頭の中には、ノヴォジェーヴィチ復活女子修道院のこと、フェオファニヤのことなど具体的にあつて、彼女をペテルブルグに送り出したのである。そしてフェオファニヤの描いたイコノスタスが日本に届き、十字架聖堂にとりつけられたのは明治十四年(一八八一年)、既に山下りんはロシア留学に旅出つたあとのことであつた。ただし、同じ十字架聖堂の『記念画帖』の別の個所には、フェオファニヤが日本の教会のために描いた最初の一枚である『降誕』のイコンだけは、すこしばかり早くに将来されていたことが記されている。

そして、これらのフェオファニヤ作のイコンは、その後の我国のイコンについて考察する際にいくつもの手掛りを提供するのである。

#### (四) フェオフェニヤ修道女作のイコン

『記念画帖』に掲載されているフェオファニヤ作のイコンをみると、そのうち六点が、現存する山下作と考えられるイコンと同一もしくはほとんど同一の図柄を示している。帰国後の山下が模写したのか、それとも山下

はフェオファニヤの居る修道院でイコンを学んできたのだから、それらの図柄は彼女が直接ペテルブルグから持ち帰ってきたのであつて、十字架聖堂のイコンとの一致は共通の源をもつ故の偶然であるのか。筆者は前者だと思ふ。山下が帰国後描いたと考えられるイコンで、図柄の出所が既に判明しているものについてみると、すべて図柄のもととは当時日本国内で入手可能であつたものばかりであるからだ。<sup>(註二十五)</sup>しかし一致しない細部もあることが見のがせず、単純に山下がこれらフェオファニヤのイコンを模写したという結論にはもつてゆけない。帰国後の山下は、「神田駿河臺北甲賀町十三番地女子神学校内に寄留し専ら筆を聖堂畫に染め」(前出『新朝野新聞』より)ていたのであり、同じ敷地内の十字架聖堂にあるイコン、それもペテルブルグ時代の師フェオファニヤ作のイコンを写すというのは如何にもあり得ることではある。しかし以下に示すように六点中一点を除いて、その推測はなりたちににくい。

ともかくその問題の六点を個条書きであげてゆこう。

#### ① 『降誕』

これは、さきほど記した早くに将来されていたフェオファニヤの最初の一点である。しかし『記念画帖』にはフェオファニヤ作のオリジナルの図版は掲載されていず、次のように記されている。

此聖像は未だ降誕聖堂(十字架聖堂のこと——引用者註)の開設されな  
い先に、下の一室(半圓、今の編輯所)で祈禱されてあつた時分に、其  
處に懸つてゐた大聖像の寫しです。而して、フェオファニヤ女史が日本  
教會の爲に畫筆を執た最初の作です。併し茲に掲げたのは全女史の原畫

から直接でなく、山下女史の複畫から取たのです。<sup>(註二十六)</sup>

そして(図9)の図版を載せている。これは山下がニコライ堂のために描き、明治三十七年に掲げられたアイコンに他ならず、<sup>(註二十七)</sup>他にもこの図柄は、曲田(図10)、高崎、修善寺の教会に計三点ある。

フェオファニヤのオリジナルを知るすべはなく、山下のアイコンとの比較はできないが、ここではつきり記されている「複畫」という言葉に頼るところが許されるなら、このアイコンは、山下がコピーし、後日本各地の教会のために同図柄を多数制作したものとみなすことができる。

なお、このフェオファニヤの「降誕」のアイコンのみは、山下留学前に日本に到着していた可能性もあり、<sup>(註二十八)</sup>「下の一室」つまり伝道館の一階で留学前の彼女の眼にふれていたかもしれない。しかし、「素より美術畫を修めんの志なりしかば同じ畫ながら聖堂畫師となることを心ならず思」(前出『新朝野新聞』記事より)っていた彼女は、その「降誕」のアイコンにあまり注意を払わなかったのではないか、それともフォンタネージの時代、油絵の黎明期にあつて、とりあえずは、我國に数少ない油彩の作品として興味ぶかくながめたであらうか。

## ②「復活」(図11)

フェオファニア作のこのアイコンの図柄は、山下作と考えられる現存するアイコンのなかに多数見出すことができる。明治二十四年に日本の正教会が来日中のロシアの皇太子ニコライに贈ったアイコンもこの図柄で、他に六点、上武佐、札幌、曲田、盛岡、高崎(図12)、柳井原の各教会にある。それらを比較すると、フェオファニヤのアイコンは、山下作とみなされるアイコン

ンよりも巾が狭く、左右両端が欠けている。山下は原画にはない両端を独自に補ったのだろうか。ところが、そういう推測を無用とするロシア製の版画(図13)と、山下がその版画を模写しアイコンに仕立てあげていったプロセスを示す二枚の下絵(図14・15)が存在する。

このロシア製の版画とは、たまたま明治三十五年正教会編輯局刊の「絵入正教大意」に掲載されているもので、版画のわくには次のように記されている。「宗教檢閲済ペテルブルグ 一八八九年十二月一日 檢閲者掌院グリゴリー エム・ビー・シドルスキー刊行 メタフロモティピヤ ペテルブルグ サゴロドヌイ大通り二十八番地。」<sup>(註二十九)</sup>これは旧約から新約聖書にいたるおそらくかなり大部な聖書挿絵のシリーズの一枚で、他の何枚かも、上記の「絵入正教大意」や明治三十四年教要社刊の「舊新約聖經畫帖」に、ギユスタヴ・ドレやシュノル・フォン・カロルスフェルトの聖書挿絵と並んで掲載されている。<sup>(註三十)</sup>

二枚の下絵は、山下りんの遺品のなかにあり、彼女が物語的な聖書挿絵からアイコンを作りあげてゆく過程を示して興味ぶかい。シドルスキー版の版画は当然原物が將來されていたはずで、それを山下はまず克明に模写している(図14)。そしてアイコンにする際には、既に右端の三人のマリアは取り除いていたが、さらに、背景をさえぎっていた岩山と噴墓の建築部分を、左上からななめに切られていた岩山のみとし、物語的要素を極力排し、ニュートラルな地をつくりだそうとの配慮がうかがえる。新たに付け加える円光と「ハリストス復活」との銘文の位置も凡帳面に定められている(図15)。

山下が、こうしてシドルスキー版の「復活」からアイコンをつくりあげたことは明白であるが、問題なのは、同図柄のフェオファニヤのアイコンとシ

ドルスキー版との関係である。フェオファニヤが「復活」のイコンを制作したのは一八七九年か八〇年だから、一八八九年検閲のシドルスキー版に、すくなくとも九年は先立っている。シドルスキー版がどのような性格のものであったのかは、今後の調査に待たうが、その『楽園追放』には、絵のなかに B. Ippolovs 1876 とのサインと年記がはっきり読みとれるのであり、<sup>(註三十)</sup> 一八八九年シドルスキーによって刊行されたのは、一八七六年（とその前後数年にわたるかもしれない）作のクリューコフの聖書物語の絵画化連作であることがわかる。フェオファニヤは、シドルスキーの刊行以前に、クリューコフの図柄を知っていたということになる。

もう一例、フェオファニヤの『復活』に類似のものに、金成（宮城県）の教会にあるイコンが挙げられる。これは、下半分の天使ふたりはそのままで、キリストのみポーズが違っているのだが、山下の遺品中に下絵も見付かっている。こういう組合せの変化は、山下の創意というよりも、やはり将来されたロシア・イコンの中に既にあり、山下は単にそれをそのままに写したと考えるのが妥当である。

### ③ 『変容』

この『変容』のイコンについても、①の『降誕』と同様、フェオファニヤ作のイコンの図版は掲載されていない。「至極美妙の作ですけれども、惜いことには硝子の反射がはげしくて全體を寫すことができません、因て止むを得ず他の版畫から寫して間に合わせました、併し全體の形は皆此通りです」<sup>(註三十一)</sup>とあり、掲載されているのが、シドルスキー版の版畫である（図18）。しかし、フェオファニヤ作のイコンも右上のモーセの部分だけは示されていて（図19）、それをみると確かにシドルスキー版と全く同じ

図柄であるから、それは信用してよいだろう。

山下作と考えられるイコンのなかに、この『変容』の図柄は一例、高清水の教会にある（図20）。しかしここでは、『復活』の場合のような下絵は残っていないし、フェオファニアのイコンの全容もわからないので、山下がフェオファニヤのイコンか、シドルスキー版の版畫か、どちらを模写したのか結論は出せない。

なおまた修善寺の教会には、下半分の三人の弟子はそのまま、上半分のキリストとモーセとエリヤの部分にギユスタヴ・ドレの図柄に取り換えられているイコンがある。これもさきほどあげた金成教会の『復活』の場合と同じく、ロシアで既にシドルスキー版とドレの聖書挿絵が組み合わさっていて、山下は（このイコンが山下りん作であるなら）それを写したのだと思われる。

### ④ 『福音（受胎告知）のマリア』（図21）

山下の作品と考えられる同図柄のイコンは現在八例を数える。札幌、曲田（図22）、盛岡、岩屋堂、上下堤、高清水、足利（図23）、高崎のそれぞれの教会にある。八例とも皆違った印象を与え山下作との文献上の記録も、送付年を示す裏書きもなく、すべて山下りんの作としてよいものかどうかは勿論疑問である。特にかけ離れた印象を与える曲田と足利の例を図版にあげておいた。

しかしこの八例、フェオファニアのイコンと比較すると細部に違いがある。八例にはそろって、右そで口の留金がない。山下はイコンを模写する時には、とても忠実に、衣紋線に至るまで克明に写すのであり、同じ図柄をくり返しているうちに多少簡略化されてゆくことはあっても、この留金のよ



うなはつきりした対象を省略するとは考えられない。それに、この「マリヤ」と対になっている「ガヴリイル」の方は、図柄が全く異なっており、「福音(受胎告知)」などの一組の場合、やはり模写される時には、まともていっしょであるうから、この「マリヤ」については、山下の写したものはフェオファニヤのイコンではないことが確かとなる。同図柄の留金のない別のロシア・イコンがあったはずで、山下はそれを写したのである。

⑤ 「大天使ミハイル」(図24)

⑥ 「大天使ガヴリイル」(図24)

この一組のフェオファニヤのイコンの図柄は二組のイコンにみられる。そしてその二組は共に文献上、山下作との確証が得られている。ニコライ堂に掲げられた一組(図25)と、柏久保教会の一組(図26)であり、前者は明治四十年刊の『東京ハリストス復活本聖堂小誌』に図版がみえ、そこに「今年新に二つの天使長の肖像が懸けられました。——中略——是亦山下女史の妙技に成り、其形、色共に本館(主教館)の二階なる十字架聖堂のイコノスタスに在る者と同じであります」と記されている。ただし震災で焼失。後者は、明治四十四年四月十五日付の『正教新報』第七二九号に、三月二十二日に正教本会より送られ到着したもので、その「描畫に就きては聖畫師山下尊師の繁忙中多大の勞を煩はせし事」と、これも珍しく山下の名が記録に見える。

図柄は細部まで確かに『東京ハリストス復活本聖堂小誌』にあるように「同じ」である。しかし、ここで例えば「複画」ではなく単に「同じ」と記されていることが、山下の写したのはフェオファニヤのイコンではないことを暗示してはいないか。ここでもやはり同図柄の別のロシア・イコン

ペテルブルグのノヴォジエーヴィチ復活(鐸木)

が山下によってコピーされたようなのである。

以上フェオファニヤのイコンを手掛りに考察を加えてきたが、結論としてフェオファニヤのイコンの図柄は何も特別なものでなく、同図柄のイコンが別にまたいくらかも将来されていたというような状況が推察されることとなった。そのなかには、金成の「復活」や修善寺の「変容」のイコンのもととなった半分だけ同図柄のイコンも含まれていたようである。そして同図柄だから、同じノヴォジエーヴィチ復活女子修道院から来ているなどとはとても言えないのであって、なぜなら事実、現在京都と大阪の教会にあるイコノスタスは、それぞれ一九〇三年エパネシニコフ工房作、一九〇七年グリヤノフ作で、様式も我国にもたらされた状況も異なるのだが、『機密の晩餐(最後の晩餐)』のイコンについては全く同じ図柄を示すということがあるからである。こういうこと、当時ロシアのイコン工房で、どのようなイコンが描かれていたかという問題は、現地での調査によって明らかになるもので、我国に残っているロシア・イコンから推測するのは、枝から幹を類推するようなもので、労多くしてしかも過ち易い。しかし別々の所で描かれた同図柄のイコンが複数将来されているのであって、特定の図柄が特定のイコン工房に限られるようなことはなかったことは以上の考察より充分うかがえる。

そのような例がもうひとつ、この十字架聖堂のなかにある。

(五) マールイシエフの『ゲフシマニヤ』のイコン(図27)

東京十字架聖堂には、フェオファニヤ作以外のイコンがいくつもあった。これがそのひとつで、十字架聖堂の『記念画帖』には、

此大聖像は、茲に十字架聖堂が開けてこのかた一ばん初めに来た聖像で、(明治七年の頃) 最初、今の様なイコノスタスが出来ない前は、只此聖像一つで祈禱されてゐました。畫家はモスクワのマルセフと云て、あちらに有名なる美術家です。

とあり、「初めて館内に祈禱が行はれた」「明治七年の末」にあわせての将来であることをうかがわせる。加えてイコンには銘文がついている。

Ликан сев образа в Сергиевой лапте художником Матильевым и пожертвован в православную церковь в Ялонию 1874 года.

『記念画帖』につけられている訳は次のとおり。

此聖像ハ聖セルギイノ修道院ニ於テ、畫術者マルセフガ描キ、而シテ日本正教會に獻ジタリ、千八百七十四年。<sup>(註三十二)</sup>

ロシア語の銘文は「聖像」の意味の *образ* の *р* が *я* になっており、日本人が描き込んだものかと思わせるが、ともかくモスクワのセルギイ大修道院(つまりザゴルスクの有名なトロイツェ・セルギエヴァ大修道院)の<sup>(註三十七)</sup> マーリースエフという画家が一八七四年以前に描いたことがわかる。図柄

は、一八三〇年代のブルーニ作で、十九世紀ロシアでも有名であったものであり、同じ図柄のイコンは我国にも多数現存している。一昨年(一九八六年)筆者が、これら我国のブルーニの模写について記した際、明治

期の模写として十二点を数えた。<sup>(註三十八)</sup> そしてその後さらに三点見付かっている

(うち二点は未見)が、ここで、画家名が知られ、それ故ロシア製である

ことがわかるふたつめの作品が見付かったことになる。他ひとつはニコライ堂にあったベシエホーノフの作品である。「記念画帖」に掲載のマーリースエフの『ゲフシマニヤ』(図27)は、あまり鮮明な図版ではないが、それでもベシエホーノフの模写よりはずっとブルーニのオリジナルに近く、しかも曲田や柳井原教会にある模写と同類であることがわかる。一昨年筆者が、曲田や柳井原の『ゲフシマニヤ』についてロシア製の可能性とともに山下作の可能性を考えてみたのは、それらが特異な様式を示したからであつた。しかし、それに近いロシア製の作品が現われたこと、そしてフェオフニアのイコンについて考察したように、同図柄のイコンがいくらかも将来されていたようであることで、我国に現存する十四点の画家名不明の『ゲフシマニヤ』の模写のなかにも、ロシア製のものが含まれている可能性が高くなつてきた。

このことはまた④であげた八例の同図柄ではあるが、様々な様式を示す『福音(受胎告知)』のイコンについても言える。図柄だけでは、山下りにアトリビュートはできないのである。かといつて様式上の判断を下せるような状況にもない。<sup>(註四十七)</sup> この先はもはや、ロシアでの十九世紀末のイコン制作についての調査をふまえた考察を待つしかない。

#### 註

(註一)「我国最初の女流聖像画家 山下りん展」笠間日動美術館 昭和六十二年六月

二十日—七月十九日。

(註二)青木茂編「明治洋画史料 記録篇」中央公論美術出版 昭和六十一年 三五三

ページ。  
長田裕子著「山下りん研究と『新朝野新聞』掲載の八日本唯一聖堂画師 山下女史立志譚」【絵】第二八〇号 日動画廊 昭和六十二年六月 一四—一八ページ。

「新朝野新聞」の該当個所のコピーを送付してください。跡見学園女子大学教授青木茂氏に感謝申し上げます。

(註三) ブロックハウス・エフロン刊『百科辞典』第七巻 ペテルブルグ 一八九二年「復活修道院」の項 二四三ページ。

(註四) 筆者は昨一九八七年十一月二十日レニングラード科学アカデミーの人造とともにこの旧修道院を訪ねることができたが、充分な時間もなく、また事前に準備もしていなかったため、また折から降りだした雪のため、満足な調査もできなかった。次の機会を期す。お世話下さった科学アカデミーのイーゴリ・プリユスニン氏、ニーナ・チュルヌイシヨヴァ氏、また科学アカデミーに紹介してくださった岡山大学教授保田孝一氏、そしてレニングラード在住の画家ナターシャ・マクシモヴィチ氏にお礼申し上げます。

(註五) *Идеи, конструкции и планы на Св. Печу. С. — Иероглифика епископа, СПб., 1908.*

〔聖なるルーシの大修道院、修道院、教会 ペテルブルグ管区〕第一分冊四五一—五九九ページ。

(註六) 川又一英著『われら生涯の決意—大主教ニコライと山下りん』新潮社 昭和五十六年 二二—四ページ。

(註七) ニコライ・イヴァノヴィチ・ティホブラゾフ (Николай Иванович Тихобразов 1818—74)

ティホブラゾフは、ブロックハウス・エフロン刊の『百科事典』(ペテルブルグ一九〇一年)によると、歴史画と肖像画の画家で、ペテルブルグ美術アカデミーでカルル・ブリューロフ (Карл Иванович Брюллов 1799—1852) に師事、一八四五年「神殿で商人を追い払うキリスト」の絵で金賞。四十七年より四十九年までローマ滞在。五十二年に「縫いものをするアルパニア娘」でアカデミー会員となる。その後はペテルブルグを離れず、注文制作と図画教育に従事、代表作はキエフとノヴゴロドの陸軍幼年学校付属教会などのイコノスタス三点、旧エルミタージュの改築された間の天井画、ニコライ・ニコラエヴィチ大公の宮殿

ペテルブルグのノヴォジエーヴィチ復活(籙木)

の正面階段に十七の装飾画、セドリツィの正教会のイコンなどである。  
(註八) ヨルダーンについては既に記した。

拙稿「ペテルブルグの山下りん」『岡山大学文学部紀要』第七号(昭和六十一年十二月)八ページ。

拙稿「山下りん研究の問題点」『岡山大学文学部紀要』第八号(昭和六十二年十二月)二〇ページ。

なお、その二稿につづくものとして、この論稿を「山下りん研究(三)」とした。

(註九) パーヴェル・ペトロヴィチ・チスチャコフ (Павел Петрович Числяков 1832—1919)

十九世紀後半から世紀末の多くの画家の師として著名で、レーピン (Илья Ефимович Репин 1844—1930) やヴァスネツォーフ (Васнецов Михаил Иванович 1848—1926)、ヴルーベリから敬愛された故に、現在まで美術史上忘れられたことはない。ブロックハウス・エフロン刊の『百科事典』(一九〇三年)によると、チスチャコフは一八四九年にペテルブルク美術アカデミーに入學。パーシハ(Персидская Баши 1793—1877)に師事。一八六一年「大公ヴァシリー・チョムヌイの結婚式での大公妃ソフィア・ウイトフトヴナ」で金賞、アカデミーからの派遣留學生の資格を得る。六三年からドイツ各地、パリ、ローマに滞在。七十年に帰国し、留學中に描いた「ローマの乞食」などの作品で、アカデミー会員となる。その後は教育に専念。七二年よりアカデミーの助教授。九二年のアカデミーの組織がえとともに、アカデミー評議員、アカデミー付属高等美術学校教授、モザイク科主任となった。

· B. M. Baehnon, *Искусство Древних, Восточных, Сувейских сопредельных. М., 1987* (ヴァスネツォーフ著「手紙、日記、回想、同時代の批評」) 一四ページ。  
Aline Isdebsky-Pritchard, *The Art of Mikhail Vrubel*, Ann Arbor, 1982, 七—九ページ。

カミラ・グレイによると、レオン・バクストやボリスフ・ムサトフもチスチャコフの最後の弟子であり、またタリトンも尊敬する画家としてゼザンヌ、ピカソ、レジェとともにチスチャコフの名を挙げたという。

Camilla Gray, *The Russian Experiment in Art 1863—1922*, London, 1986, 二九

四〇、六一、一七二ページ。

(註十) ミハイル・ペトロヴィチ・ポトキン(Михаил Петрович Поткин 1839-1914)

歴史画家として当時は有名で、一八九一年刊のプロックハウス・エフロンの『百科事典』では、「ロシアで最も優れたデッサン力をもつ画家のひとつ」とまで評価されていた。しかしその後は、ソビエト大百科事典の第一版(一九二七年)と第二版(一九五〇年)をみると、モスクワのクレムリンのフョウエネンスキー受胎告知大聖堂の修復(二八八二年)や美術史家としてのイヴァーノフの評伝出版(二八八〇年)、またイヴァーノフの多数の習作の収集に加えて、古代ギリシアからイタリア・ルネサンスに至る工芸品の私設美術館の設立などのほうが重要視されるようになっており、第三版(一九七〇年)では、項目自体消えてしまっている。

美術アカデミーへの入学は一八五六年で、ザヴィヤロフ(Федор Семенович Завьялов 1810-56)とブルーニ(Федор Антонович Бруни 1799-1875)に師事。五八年からイタリアを主としてドイツ、フランスに滞在。六三年に帰国し、「タンバリンを持つバッカスの女」と「バビロンの流れのほとりにて」でアカデミー会員となる。新約聖書と初期キリスト教時代をテーマにした歴史画と風俗画が多く、旧儀式派を描いた作品もある(一八七七年、トレチャコフ美術館およびロシア美術館)。七九年よりアカデミーの評議員を務め、八八年のコペンハーゲンでの国際産業博覧会でのロシア部の準備など美術行政にも水く従事した。エッチングによる版画作品も多く、また考古学者としてヨーロッパ各地を旅行、工芸品の収集はその折のものである。

山下の滯露日記の一八八一年九月二十九日のところに、エルミタージュで模写中にヨルダン先生とともに「トットキン先生来ル」とある。滯露日記中そこに唯一個所登場するこの画家は、後年ヨルダンのあとを引き継ぐことになるポトキンのことであろう。ポトキンはこの時四十二才であった。

(註十一) 註五の「聖なるルーシの…」第一分冊 五九ページ。

(註十二) ベシエホーノフの工房については既に記した。註八の拙稿「ペテルブルグの山下りん」 一一、一三ページの註十三。

ヴァシリイ・マカロヴィチ・ベシエホーノフが、マカール・サムソノヴィチの子であることは、次の書物で確認できた。

A. B. Барышников, *Искусство Лазаря. М.-П., 1934.* (バクシンスキー著「パレフの芸術」) 二五七ページの註七十三。

(註十三) 『東京復活聖堂畫帖』 正教本会編輯所 明治三十八年(明治三十七年初版)

図版八ページの第七図 本文一五ページ。

(註十四) 同 図版六一ページの第八四図。

(註十五) 『東京ハリストス復活本聖堂小誌』(以下「小誌」と略す) 正教本会編輯所

明治四十年 三四ページ。

註十三の「東京復活聖堂畫帖」本文三三ページには「南脇のは祈禱する天使で、原畫はレフの大作」と誤って伝えられている。

(註十六) テイモレオン・カルル・フォン・ネフ(Friedrich Karl von Nef) ロシア名

「Тимофей Андреевич Нефф 1805-76)

プロックハウス・エフロンの『百科事典』(二八九七)には、次のように記されている。

エストニアに生まれ、ドレスデンのアカデミーを経て、イタリアにゆき、ラファエロなどの古画を学ぶ。一八二六年よりペテルブルグに滞在。間もなく肖像画などで上流階級に人気を得、三二年には宮廷画家となった。三四年ペテルゴフ宮のアレクサンドリア公園内の教会堂のイコンを描いたことで終身年金を得る。三九年冬宮の小礼拝堂に「機密の晩餐(最後の晩餐)」などのイコンを描き、アカデミー会員となる。四九年、イサク大聖堂のイコンスタスで、アカデミー教授資格を得、五五年より教える。六四年以降はエルミタージュの絵画部の責任者を務める。作品数は多く、肖像画、イコン、美人画、イタリアやエストニアの風俗画で、ペテルブルグとその周辺の皇帝家や貴族の館、教会堂に所蔵されている。女性像にネフの才能が特にはつきり表われており、優美なポーズと快い色彩が特徴であるが、肖像画の場合モデルを理想化しているため、似ていないことが多い。全作品を通じて、デッサン、色、筆の使い方は巧みだが、構図は冷たく、表現は弱く不自然である。

かなり辛辣、しかし的確であると思うが、レービンは、その回想録「遠いこと、近いこと」(抄邦訳題名「ヴォルガの舟ひき」)のなかで、一八六〇年代なかばの美術アカデミーを描写し、ネフ教授について以下のように記す。

だれよりもおめでたいのはドイツ人のネッフだった。ひとりよがりの天才ネッフは、みんなが自分を熱愛しているものと信じて疑わなかった。夜の授業に姿をあらわすことはめつたになかったが、出てくるときはまことに堂々としている。胸を張り、その胸には勲章をつけ、得々として、階段教室の上の踊り場を堂々と歩いた。この老人の赤い頬は自己満足に光りかがやき、その視線は何ものをも見ない。かの有名なネッフさまを口をあんぐりあげ人垣を築いて迎える学生たち、といわんばかりに、それこそ皇帝のように左右にうなずきながら通る。ところが生徒のほうでは、汗まみれになって、マフラード鉛筆の粉をはらい、絵をかかことに没頭していて、ネッフなど見向きもしないのだった。

イリヤ・レーピン著 松下裕訳「ヴォルガの舟ひき」中央公論社 昭和六十一年 七六ページ。

美術アカデミーのすばぬけた優等生で、後に反アカデミーの移動派に加わることになるレーピンは、一九世紀のアカデミーの画家の姿、職人わざに欠けるところはなすが、それに充足している姿を活写している。

なおネフの代表作の一つであるイサク大聖堂のイコノスタスのうち「キリスト」と「聖母子」のイコンのコピーが横浜のハリストス正教会に伝わっている。一八五六年完成のイサク大聖堂は、内部壁画に当時の美術アカデミーの校長シェプーエフ(Baranukh Krysanukh Il'eyev 1777-1855)の監督のもと、カルル・プリューロフ、ブルーニ、バーシシらがごぞつて参加した十九世紀前半の国家的事業であり、そのイコンが地方の教会堂のためにコピーされたことは想像に難くない。横浜のコピーもその一端とみなすことができる。

同様にもう一例、ネフの作品ではないが、イサク大聖堂のために、フランスの画家で、ダヴィドヤルフェーヴルに学んだシャルル・シュティイベン(Charles Steuben 1788-1856)が描いた七点のイコンのうち「キリスト復活」のコピーが東京のロシア領事館内の礼拝堂にもたらされていた。山下りんはそれを模写し、ニコライ堂に明治三十五年に掲げられたというが、関東大震災で焼失した。

Georgy Butkov, *St Isaac's Cathedral, Leningrad*, 1980.

ペテルブルグのノヴォジューヴィチ復活(録木)

註十三の「東京復活聖堂畫帖」第八十二回および本文二二三ページ。

(註十七) 米田治泰・森安達也共著「永遠のイコン」淡交社 昭和四十四年 図二十六に、左右対称に描かれた同図柄のイコンが二点みえる。

(註十八) 一八八二年八月二十二日の日記に「日本二行小形の画ノ名ヲ認ム」と日本語の銘文を書き加えたことを記している。

(註十九) 近江榮・藤森照信共編「近代日本の異色建築家」朝日選書二六一 昭和五十九年 「河村伊蔵」の章の一三一ページ。

(註二十) 「東京ハリストス降誕十字架聖堂記念畫帖」(以下「記念画帖」と略す) 正教本会編輯所 明治三十八年 本文二二二ページ。

(註二十一) 同 本文五二ページ。

(註二十二) インノケンティイは、一八六一年カムチャツカ管区の主教の時に函館に来て、聖体礼儀を行なっている。インノケンティイについてはとりあえず次の書物を参照のこと。

牛丸康夫著「日本正教史」日本ハリストス正教会教団 昭和五十三年 二六一—三二二ページ。

(註二十三) また同時にニコライは、既に記したように、ニコライ堂の建築設計とイコンについて、ロシア滞在中にペテルブルグの府主教イシドールに頼り出して、シチュルポーフ(Михаил Апофенич Шурпов 1815-1902)とベシエホーノフは一八八〇年内にそれぞれ設計とイコン制作をすませている。

註十三の「東京復活聖堂畫帖」の図版二ページの第二回および本文一五二ページ。(註二十四) 註二十二の牛丸著書 六六ページ。

(註二十五) 山下りんが写したイコンは、ニコライ堂に送られてきたベシエホーノフ作、公使館の礼拝堂にあったもの、京都の教会に送られてきたエパネシニコフ工房作、そして版画のイコン(「コゼリシチナの聖母」など)が判明しており、以上すべて、彼女が帰国後日本で接した作品である。彼女のイコンの図柄の出所については稿を改めてまとめる予定である。

(註二十六) 註二十の「記念画帖」の本文十三ページ。

(註二十七) 註十三の「東京復活聖堂畫帖」の図版六二ページ第八十六回および本文四二二ページ。

(註二十八) 十字架聖堂のイコノスタスを備えての開設の一八八一年以前とはいっても、

そもそもことのおこりが一八七九年ニコライの府主教インノケンティへの依頼にあるのだから、将来されたのはそれ以降で、開設時とそれほど違わないことになる。山下の横浜出港は一八八〇年十二月十二日。

(註二十九) *Два Дух. Лианырво Снд. 1 Дек. 1889г. Лианыр. Архиван. Туропна*

*Иванне М. И. Сурперано Мерахпоюрнн Снд. Заропннн прюсертт. No 28*

メタフロモティビヤとは、モスクワのグラナト兄弟社刊の『百科事典』第七版(一九一三年)によると、デカルコマニートと同じことで、絵の転写の一つの方法で、はじめは子供の遊びに使われていたが、陶磁器、ガラス、金属、皮革などへの転写に應用されているという。

(註三十) 『舊新約聖經畫帖』の「舊言及び注意」の四ページには以下のようにある。

帖中の原畫は、重に「キエフの亞使徒 聖侯ウラヂミル聖堂の畫帖」、サンクト、ペテルブルクに於るシドルスキイ十一版の『舊新約歴史教科用の聖畫』、ライプチヒ刊行のユリイス シュノル フォン カロルスフェルドの『聖經畫集』及びグスターフ ドーレの『繪入聖經』等、其他の者より採れり。

キエフの「ウラヂミル聖堂」の絵とは、一八八五年から九六年までかけてヴァスネツォーフが描いた壁画のことである。レーピンから「これこそロシア正教の教会芸術のルネサンス」と絶讃された作品で、これも模写は大量になされたようだ。その「聖母子」をアイコンにコピーしたものはウイーンのロシア教会 (Die Russische Orthodoxe Kathedrale zum heiligen Nikolaus in Wien, Jaures-gasse 2, Wien III, 一八九九年成聖) にもあり、またそこではステンダグラスにもその図柄が写されている。我国には京都の教会に「福音(受胎告知)」のコピーがもたらされているようだが、筆者はまだヴァスネツォーフの図柄との比較はしていない。

註九のヴァスネツォーフ著書 四七九ページ。

註十六の「ヴォルガの舟ひき」 二二二、三三ページ。

『京都至聖生神女福音聖堂の記念畫帖』(以下「京都圖帖」と略す) 正教本会

編輯所 明治三十七年 本文九および一〇ページに、「京都の聖堂の聖障中特に最も注目するに價する者は生神女福音、即ちキエフ大聖堂のワズ子ツォフ氏の原畫に依れる者云々」とある。

(註三十補) 『舊新約聖經畫帖』の第一図。このクリューコフは、おそらくヴァレリアン・ステバノヴィチ・クリューコフ (Варяпан Степанович Крюков) のことで、ブロックハウス・エフロン刊の『百科事典』に記載はないが、一八八九年にブルガーコフが著した最近二十五年間のアカデミーの展覧会に出品した芸術家についての人名事典には、クリューコフは、一八五四年にアカデミーに入學、六〇年にプーシキンの戯曲「モーツァルトとサリエリ」の一場面を描いた最初のオリジナルの作品を出品。八〇年より繪画に關しての第一級芸術家の称号を得た、とある。

Ф. И. Брытков, *Наука живопису, том 1-я, Снд. 1889.* (ブルガーコフ著「我國の芸術家たち」) 二二四ページ。

(註三十一) 註二十の「記念画帖」本文二九ページ。

(註三十二) 註十五の「小誌」三七ページ。

(註三十三) この同時代の資料は、鹿島建設の秘書室の幸田初枝氏より御教示をいただいたものである。

(註三十四) 京都の教会のイコノスタス(聖障)については、註三十の「京都圖帖」の本文五ページに、主教ニコライが「同志の友にて特に日本教会の為に盡力し居る」[モスクワ府首司祭ニコライブラゴラズーモフ師]に依頼し、「モスクワ府の一信徒ワシリイ ドウディスキンなる人」がブラゴラズーモフ師を助け、「専ら聖障の事に盡力して聖障製作の工場を有するイアコフ、エパネスニコフ氏と交渉し此聖障一切を社主イアコフ氏より日本正教會の京都の新築聖堂に寄附する事とな」ったことが記されている。そして確かに京都のイコノスタスには *портреты М. Е. Ермакина* と製作者の名の印が押されている。

また現在大阪教会にあるイコノスタスは、もと松山の教会にあつたもので、『松山ハリストス復活聖堂』(正教本会編輯所 明治四十四年)の本文の三および九ページによると、「モスクワの慈善家キセニヤ フェオドロウナ コレスニコワ」夫人が建築費ともども寄付したもので「畫者はフェ、グリヤノフ氏で、モスクワ有名の美術家」とのことで、京都の場合と同様、イコノスタスに

†Гулянов Москва 1907 と今度は手書きの署名、年記がある。

このエバネシニコフとグリヤノフについて、ひと昔まえなら、容易に資料は見つからなかったろう。しかし近年のソビエト連邦におけるビザンチン学が、ビザンチン学の起源である十九世紀を問題にはじめ、十九世紀から二十世紀にかけてビザンチンや中世ロシアのイコンの修理にたずさわり、同時に自らもイコンを制作した画家たちについて記すようになってきたため、資料が入手できることになった。ただしその画家自身が研究対象ではないため言及はあくまで断片的である。ペシエホノフについては既に紹介したが(註十二参照)、エバネシニコフについては、ウズドルノフの著書に、ヤコフ・エフィモヴィチ・エバネシニコフ(Яков Ефимович Еванешников)は、イコン画家かつイコン修復家で、一八九三年から九四年にかけてザベリン(И. В. Забелин)とシーゾフ(В. И. Сизов)の監督下で、助手をつかってチュードフ(Чудов)修道院の大聖堂のイコン百二十点を一度に修理したとの記述がある。

Г. И. Баронов, *История открытия и изучения русской средневековой живописи XIX в.*, Москва, 1986. (ウズドルノフ著「ロシア中世絵画の発見と研究の歴史十九世紀」一五六ページ。

またグリヤノフについては、同じウズドルノフの著書の三二五ページに、ヴァシリイ・バヴロヴィチ・グリヤノフ(Василий Павлович Гулянов 1866-1920)は同じくイコン画家兼イコン修復家であり、一九〇五年、中世ロシア文学愛好家協会(Общество любителей древней письменности 創設一八七七年)は、収集したイコンの色層の状態の悪いことを憂えて、彼に点検させたとの記事がみえる。またボプロフの昨年の著書には、革命前モスクワには二十以上の私営のイコン工房があったが、そのうち最も重要なふたつのうちのひとつとして、宮廷のためにイコンを制作していた、スハレフスカヤ広場のカルポヴィチ館のグリヤノフの工房(Искусственные поставщики императорского двора В. И. Гулянова, Сухаревская площадь, дом Карпович)が挙げられている。

Ю. Г. Вобров, *История реставрации древнерусской живописи*, Л., 1987. (ボプロフ著「中世ロシア絵画修復の歴史」三七七ページ。

それぞれの様式は、京都のエバネシニコフのイコンは、一八八〇年以降の例えばヴァスネツォーフの、ロシアの古画をふまえた民族主義的なものであり、大

ベテルブルグのノヴォジエーヴィチ復活(録木)

阪のグリヤノフのイコンは、制作年代はそれより数年はやいのであるが、一八八〇年以前のアカデミズムの甘美さをそなえた全ヨーロッパに通ずるもので、ネフやまた十九世紀後半のフランスのアカデミーの大家ブグロー(William Bouguereau 1825-1905)の宗教画を思わせるものである。

(註三十五) 同じ図柄のロシア・イコンはさらに一点高崎の教会にもある。そして山下も同図柄のイコンを一点描いており(現在笠間日動美術館に寄託)、またそのための下絵もある。山下はいずれかのロシア・イコンを写したのである。

(註三十六) 以上註二十の「記念画帖」の本文九一ページと図版四〇ページの第三十九図。

(註三十七) なおこのマールイシェフという画家については、はじめに参照した註五の「聖なるルーシの」をみると(第一分冊二九ページ)、ベテルブルグのトロイツェ・セルギエヴァ修道院(Троице-Сергиевская пустынь)は、モスクワのトロイツェ・セルギエヴァ大修道院の修道院長ヴァルラムが、女帝アンナ・イヴァーノヴナからフィンランド湾に面する別荘地を与えられて、一七三四年に設立した修道院で、その掌院のひとりとしてイグナチイ・マールイシェフ(Игнатий Матвеев)の名がある。一八八一年三月一日(露曆)、山下りんもその近くに居た、皇帝アレクサンドル二世暗殺現場に建てられたキリスト復活教会の立案者であり、また絵もたいそう上手であったと記されている(第一分冊四二ページ)。「モスクワの」マルセフではないが、この人物のことかも知れない。

(註三十八) 註八の拙稿「ベテルブルグの山下りん」二、三ページ。

(註三十九) また最初に記した「山下りん展」を機に下絵もさらに一点、山下の遺品より発見されている。

(註四十) 様式上の問題点については既に、註八であげた拙稿「山下りん研究の問題点」に記した。

(補註) エカチエリナ・アレクサンドロヴナ・ヴァフテル(Екатерина Александровна Вахтер 1860-?)

註三十補のブルガーコフ著書の七四ページによると、ヴァフテルはベテルブルグ生まれ、一八七八年から八五年までアカデミーで学ぶとあるから、ヨルダン死後修道院に教えるにきていたのは、まだアカデミーの女学生のときであった

ことになる。アカデミーでは習作とデッサンで、大金メダルを二度、また一八八四年には「クレオパトラの死」で小金メダルを受けている。

(追記)

本論稿は、昭和六十二年度科学研究費補助金(奨励研究A 課題番号六二七二〇〇二一 「山下りん研究—十九世紀ロシア絵画史のなかでの位置づけ—」)を受けての成果の一部である。

また、英文レジュメは、岡山大学講師メアリー・マックリモン氏にチェックしていただきました。感謝申し上げます。